

新興国レポート

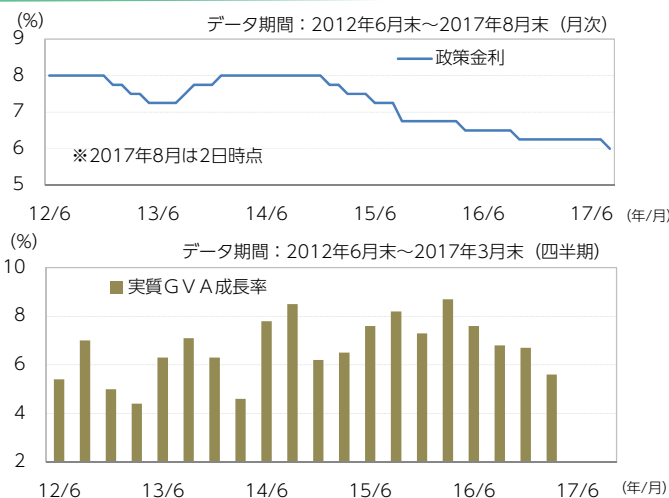
インド 10ヵ月ぶりに利下げ

利下げにより個人消費や設備投資の活発化を狙う

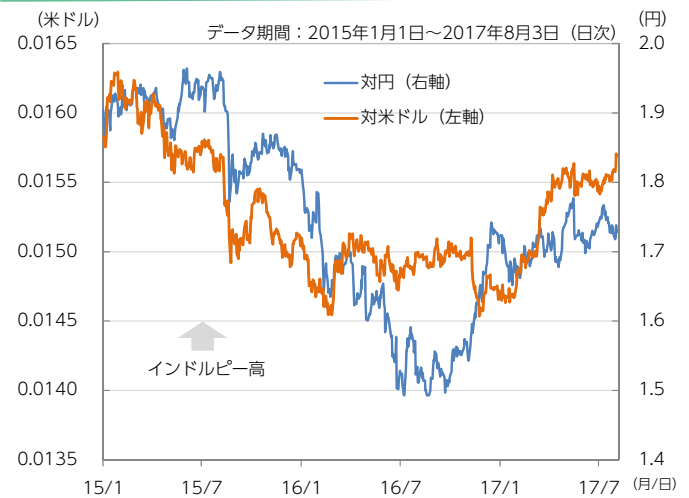
- 政策金利を6.00%に引き下げ。2017年度の実質GVA成長率見通しは据置き。
- 今後の追加利下げ観測の後退や、主要通貨に対する世界的なドル安の流れ等を背景に、インドルピーは米ドル対比で約2年ぶりの水準まで上昇。

- インド準備銀行（RBI）は8月2日、金融政策委員会（MPC）で、大方の予想通り政策金利であるレポレート（Repo Rate）を0.25%引き下げて年6.00%にすると決定し、即日実施しました。利下げは10ヵ月ぶり、政策金利が6.00%に下がるのは2010年10月以来約7年ぶりとなります。直近6月の消費者物価（前年同月比）は1.5%上昇と2012年以降で最低となり、RBIが適正水準と見る4%前後を大きく下回ったことから利下げの余地が生まれていました。MPCは利下げ決定の要因として、物価の上振れリスクの後退を挙げました。2016年度の実質GDP（国内総生産）成長率が7.1%（前年度比）と、中国（2016年）の6.7%（前年比）を上回る等、インド経済は概ね好調さを維持しています。しかし、足元では7月1日のGST（財・サービス税）導入で中小企業等一部に混乱がみられているようであり、また昨年11月の高額2紙幣廃止以降、家電製品等一部の消費が停滞気味となっているようです。経済への影響も懸念されることから、今回の利下げは物価が下がる中で金利を下げ、成長のけん引役である個人消費や設備投資を刺激する目的があるものと思われます。尚、RBIは利下げ実施にも関わらず、物価が現在の低い水準から今後上昇する可能性があるとし、中立の金融姿勢を維持しました。
- RBIは同日発表した成長率見通しで、GDP統計の一部で生産者側の景気を測る実質GVA（総付加価値）ベースで2017年度の伸び率を従来の7.3%に据え置きました。2016年度の6.6%から成長が加速するとみています。一方、見通しを取り巻くリスクは上振れ・下振れリスクとも均衡しているとしました。RBIはモンスーン期の雨量は平年並みと予測し、農業生産の見通しを楽観的とする一方、鉱工業やサービス業の勢いが鈍化しつつあることに懸念を示しました。
- 一部で緩和姿勢に転じるとの予測もあったRBIの中立の金融姿勢が維持され、次回10月のMPCでは利下げが見送られるとの見方や、米金利上昇観測の後退による主要通貨に対する米ドル安の流れ等を受け、インドルピーは対米ドルで約2年ぶりの水準まで上昇（インドルピー高）しました。一方、対円では約1年半ぶりの水準近くでもみ合いを続けています。

図表1：インド政策金利と実質GVA成長率



図表2：インドルピー相場（対米ドル・対円）



出所：図表1～2はブルームバーグデータを基にニッセイアセットマネジメントが作成

●当資料は、市場環境に関する情報の提供を目的として、ニッセイアセットマネジメントが作成したものであり、特定の有価証券等の勧誘を目的とするものではありません。実際の投資等に係る最終的な決定はご自身で判断してください。●当資料は、信頼できると考えられる情報に基づいて作成しておりますが、情報の正確性、完全性を保証するものではありません。●当資料のグラフ・数値等はあくまでも過去の実績であり、将来の投資収益を示唆あるいは保証するものではありません。また税金・手数料等を考慮しておりませんので、実質的な投資成果を示すものではありません。●当資料にインデックス・統計資料等が記載される場合、それらの知的所有権その他の一切の権利は、その発行者および許諾者に帰属します。●投資する有価証券の価格の変動等により損失を生じるおそれがあります。●手数料や報酬等の種類ごとの金額及びその合計額については、具体的な商品をお勧めするものではないので、表示することができません。●当資料のいかなる内容も将来の市場環境の変動等を保証するものではありません。

商号等：ニッセイアセットマネジメント株式会社 金融商品取引業者 関東財務局長（金商）第369号

加入協会：一般社団法人投資信託協会 一般社団法人日本投資顧問業協会